

沢村貞子著「わたしの脇役人生」新潮文庫 1987年4月10日刊を読む(1)

## 気どらない(普通の)暮らし

1. 選ばれた人たちが、おかしいほど懂れる普通の暮らし……その言葉をきく度に、私は自分の育った東京の下町、浅草を思い出す。そこにはフンワリと暖かくて肩の張らない生活がたしかにあった、ごく平凡な毎日が……。
2. 狭い路地の両側に同じような造りの家が、<sup>ひさし</sup>庇を重ねるように並んでいた。広くはないが、家族はみんな、手足をのぼして眠っていた。格別、凝った家具や洒落れた<sup>しや</sup>襖、<sup>ふすま</sup>蒲団がある訳ではなかったけれど、朝晩の掃除が隅までゆきとどき、こざっぱりして気持がよかった。みんな世話好きだけれど、お互いに他人の暮らしに首を突っこまないから一余計な神経をつかうこともなかった。
3. 古い木造家屋のあちこちが傷んで、引っ越さなければならぬ時でも一無理をして、もう少し立派な家へ……などとは決して思わない。わが家の収入をよく考えて、それに見合ったホドホドのところを探す。大それた夢に浮かされれば、借金の重さに押されて転んで、果ては、とんでもない大怪我をする、ということ、この人たちはよく知っていた。見栄や気取りで眼が曇っていないから、世間のことがよく見えたのだろう。
4. 親たちのうしろ姿一少々格好は悪いけれどセッセと働くのを見て育つから、子供たちもめったにグレなかった。欲しいものを買ってくれないから……などと甘<sup>ふてくさ</sup>たれて不貞腐れれば、子供仲間の笑いものになる。ガキ大将も、弱い子はチャンとかばってやった。  
「この子、頭がいいんだからなぐるなよ、宿題、教えてもらえなくなるぞ」
5. 子供心にも、もちつ、もたれつの庶民の暮らし方を心得ていた。学校の成績がどうであろうと、親は知らん顔をしているから、落ちこぼれなどと軽蔑されるものもない。だから皆のんびりしていて、友だちをいじめたり、足を引っ張ったりするようなみみっちいことはしない。安物のズボンをはいた子も、上等のセーターを着た子もワイワイガヤガヤ学校から帰れば<sup>かばん</sup>鞆を放り出して遊び呆<sup>ほう</sup>け一底ぬけに明るく、たくましかった。
6. 横丁の人たちは、大体、着るものにあんまりこだわらなかった。汚れば洗い、破れば繕って、決してボロはさげなかったけれど、分不相応のものを着ようとはしなかった。
7. この場合の分という言葉に一職業による差別とか卑下の意味は露ほどもない。人それぞれの仕事の性質やふところ工合に応じた暮らし、ということで、無理をすれば、ろくなことはない、と

いうわけだった。普通のおじさん、おばさんのバランス感覚は、びっくりするほど鋭かった。

8. 近所のはねっ返り娘が、親を泣かして無理矢理買った上等の着物を着て、シャナリシャナリと町内を練り歩いたりすると、八百屋のおかみさんたちがジロリと見て、

「オヤマア、どこのご令嬢かと思ったよ。それ、借り着かい？似合いもしないものを着るから、折角の器量がガタ落ちだよ」

などと、鼻で笑って、意地が悪い。

9. そのくせ一自分の娘が、よその結婚式によべれたりすると、

「そんな目立つものを着ていっちゃいけないよ、化粧はうすくおし、今日はとにかく、花嫁が引き立つようにしなけりゃあ……」

と他人の娘に気をつけて……優しい。それがこの人たちの、つきあい方だった。

10. 春秋のお彼岸のおはぎや五目ずし、祝ごとのお赤飯を近所へ配るのも、相手を喜ばせたいからである。やったりとったりが多すぎて、少々もてあますときもあつたけれど……。

11. おかみさんたちは、身体だけが資本の働き手や、育ちが盛りの子供たちに何とか、美味しくて栄養のあるものを食べさせようと眼を皿にして町内を走りまわる。安い材料でも、切り方、煮方、焼き方に念をいれれば結構食べられる。ひじきと油揚げの煮物だってバカに出来ない。ひじきの洗い方、いため方—油揚げの油ぬきを忘れず、火加減、味加減に気をつければ栄養もたっぷりあると、料理の偉い先生も言っていた—五目豆にきんぴらごぼうの常備菜も絶やさない。揚げたての豚カツを食べたあとは、お茶漬一口と決まっているのから、どこの家の糠味噌も朝晩の手入れをかかさない。有名なあすこの料理屋のあれがうまいと知ってはいるが、値段を聞いただけで胃が縮まる。たった一度のご馳走代で、10日分ぐらいの肉や魚が買えるとわかっているは……足が向かない。たまに外食するときは、気のおけない小料理屋をえらび、献立表に松竹梅とあれば、ハイこれ……とすまして、梅の字を指す。松は皿小鉢からして上等に違いないが、竹と梅の違いは、お椀の吸い口に柚の薄切りがはいっていない、とか、食後の果物がメロンでなくて蜜柑—というぐらいのことが多いからである。

12. 昔はそういう並のお客を大切にしてくれる洒落れたお店があった。浅草の観音裏の萬盛庵という大きなおそばやさんで、船板塀に冠木門。広い庭には四季それぞれの花が咲き、つくばいに冷たい水が溢れ、どの離れも、いつもお客がいっぱいだったが、お店の人に、

「ここで一ばん美味しいおそばは？」

ときけば、すぐに、

「ハイ、ざるそばでございます」

という返事がかえってきた。天麩羅や鴨南ばん、独特の鍋焼きも評判だったけれど、その頃五銭のざるそばこそ、そば屋の看板—それを食べて下さるお客さまが一ばん大切、というのが、店の主人の信条だったという。

13. 私の母もよく言っていた。

「並ながなによりさ、人並みの暮らしが出来ればそれで結構。むやみに慾張ったって仕様がない。  
一升ます榊に、一升五合ははいらないからね」

14. 庶民ののぞみは、とにかくつつましかった。毎日セッセと働いた上で、住んで着て食べられれば、それで人並み—ありがたい仕合わせだ、と暮らしの不満はめったにきいたことがなかった。

P27 ~ 31

[コメント]

東京・浅草の下町の心豊かな日々の生活の様子がよくわかる珠玉の文章。

— 2012年3月25日 林 明夫記 —